

名古屋掖済会病院様

▶▶ Pentio PKI Private CA + Pentio PKI USB Token 2100 + FirePass®

地域診療所との“病診連携”を支える 情報基盤「エキサイネット」に ペンティオ PKI ソリューションを採用 セキュアな情報共有環境で 常にベストな医療体制を目指す

地域中核病院として地元の診療所、クリニックとの連携を図り、より質の高い地域医療を提供しようという「病診連携」を進める名古屋掖済会病院。情報共有の基盤として「エキサイネット」の開発・整備を継続的に続けてきました。その一貫として、より高度な個人認証環境構築のため、ペンティオのPKI プライベートCAとPKI USBトークンを採用しました。



名古屋掖済会病院 情報管理センター
センター長 奥村幸光氏

USER DATA

名古屋掖済会病院

昭和23年に日本海員掖済会病院として開院。昭和26年に現在の名古屋掖済会病院と改称。えきさい(導き、たすける)の精神に基づき、地域社会との強固な信頼関係をバックボーンとした医療の遂行を目指している。

地域全体の医療環境向上のため、独自の医療病診情報システム「エキサイネット」の構築に2002年より着手。その後もたゆまぬシステムの更改を続け、名古屋西部地域における医療病診連携を進める、先進的な医療機関である。

<http://www.nagoya-ekisaikaihosp.jp/>
愛知県名古屋市中川区松年町4-66

課題

PROBLEM

患者の診療情報をネットワーク上で共有するためのセキュリティレベル向上

USBキー(ID&パスワード)を利用していたが、セキュリティをより強固なものへと移行し、診療情報をネットワーク上で安全に共有したい。

連携機器の相性問題などシステムの構築・運用に余計な労力を要する

これまでの環境では、認証デバイス(USBキー)とIP-VPN機器の連携不足によるシステムトラブルに悩まされていた。

ITスキルの低いエンドユーザではシステムを使いこなせない

これまでの環境では、高齢の医師などITスキルの低いエンドユーザから「アクセスできない」などの問い合わせが多かった。

解決策

SOLUTION

PKI プライベートCA+PKI USBトークンによるPKI認証で本人認証を強化

証明書を搭載したUSBトークンでの認証により、本人認証を強化。アクセス権限者のみが共有情報にアクセスできる環境を実現。

ペンティオはCAとUSBトークンを一括で提供でき、PKI プライベートCAはFirePassとの親和性も高い

ペンティオはCAと認証デバイスを同時に提供、一括した認証機器のサポートが可能。また、SSL-VPN機器として採用したFirePassとの親和性も検証済みで導入事例も多い。

特別なITスキルを必要としないPKI USBトークン

USBトークンならPCのUSBポートに刺してPINコード(パスワード)を入力するだけで利用可能。特別なITスキルを必要とせず、誰でも手軽に認証が受けられ、利用時のハードルが低い。

地域診療所との“病診連携”を支える 情報基盤「エキサイネット」にペンティオ PKI ソリューションを採用

地域医療の発展を目指す 先進的な試み「エキサイネット」

名古屋掖済会病院は救急救命センターを持ち、災害拠点病院、臨床研修指定病院にも指定されている地域中核病院です。同病院の取り組みの中で注目に値するのが地域医療の発展・充実に目的とした“病診連携”です。

日常的な診察は自宅近くの診療所・クリニックで受け、慢性疾患や重篤な症状の患者は地域中核病院が受け入れるという仕組みで、高価な検査機器を導入できないクリニックに対して中核病院が検査を代行したり、入院中の患者をクリニックの医師が診察できる開放型病床を活用した主治医2人制度などを推進しています。

こうした病診連携を実現するのに不可欠なのが、病院と診察所間の情報共有です。掖済会病院は情報共有のための基盤として2002年、独自の「エキサイネット」を開発。その後、このシステムを進化・発展させ、地域の病院や診療所とカルテデータやCT・MRI画像などの患者情報のオンラインでの共有を進めてきました。

しかし、言うまでもなく患者の病歴や投薬歴、各種検査画像などの情報は、決して外部に漏らしてはならない個人情報です。そこで掖済会病院ではオンラインでの情報の送受信にVPNサービスを利用していましたが、当初はさまざまな問題があったと言います。

「院外の診療所やクリニックからアクセスしてくるユーザの多くは高齢の医師で、設定や操作が難しいという意見が寄せられていました。接続できないという声に対応するため、診療所に向くこともしばしばありました。そこで、高度なITスキルを必要としないUSBデバイスでの個人認証でセキュリティを確保する方法を選びました」(同病院情報管理センター長、奥村幸光氏)

安全性と操作性に優れた USBデバイスを選択

当初、名古屋掖済会病院ではUSBデバイスとして「USBキー」を選択。実際に導入して稼働を始めました。PCに差し込み、PINコードを入力するだけでブラウザを開き、ログインするまでを自動で行えるという意味で、この

デバイスは病院のニーズを満たすものではありませんでしたが、一方で問題もあったと言います。

「認証デバイス(USBキー)とIP-VPN機器の連携不足によるシステムトラブルが頻繁に起きたんです。機器の相性という意味で不安定だったんですね。そこでUSBトークンとCA



ペンティオ PKI ソリューションで、 地域診療所とのよりセキュアな 情報共有体制を作ることができました

名古屋掖済会病院 情報管理センター センター長 奥村幸光氏(写真中央)、
主任 加藤三千代氏(写真左)、SA 今井摩弥仁氏(写真右)

の双方を開発している企業はないかと探している中で、ペンティオ株式会社のことを知ったんです」(同センター主任、加藤三千代氏)

ペンティオの担当者との面談の中で、デバイス内部で認証を行い、秘密鍵を外部に出さないUSBトークンの方が、USBキーに比べてよりセキュアであることを知り、ペンティオPKI USBトークンの導入を決めたのです。

さらに、ペンティオのUSBトークン&CAと親和性が高く、多くの導入実績もあるF5ネットワークスのSSL-VPN製品FirePassも併せて導入し、システムの安定性の向上を図りました。また、FirePassとPKI認証サーバ

を冗長化させ、いかなる状況においてもシステムが停止しない体制を構築したのです。

救急救命医療のスピードも高める セキュアな情報共有体制が完成

現在、このエキサイネットを活用しているユーザは、院内の医師が約50名、院外の診療所、クリニックの医師が約80名。レントゲンやCT・MRIなどの画像情報をはじめとするすべての検査結果が、検査終了後ただちにサーバに登録され、USBトークンを持つアクセス権限者の間で共有化することができます。

診療所やクリニックから名古屋掖済会病院に紹介されてきた患者の情報を共有化できるというメリットだけでなく、当直の医師しかいない深夜などの時間帯に運ばれてきた救急患者の検査結果を担当医が自宅PCで閲覧し、病院に駆けつける前に初期対処や治療の準備についての指示を行えるという利点もあります。地域医療の質の向上だけでなく、救急救命医療のスピードアップにも、エキサイネットは大いに貢献しているというわけです。

「病院は命を預かる場所。治療も、それを支えるシステムの構築にも、常にベストを尽くさなければならないと考えています。ペンティオのPKIソリューションは、安全性、操作性、安定性など、すべての面で我々の要求水準を満たすものであり、いい選択だったということを実感しています」(奥村センター長)

私たちペンティオにとっても、製品の提供を通じ、地域医療や救急救命医療の発展に寄与できたことは、大きな喜びです。今後も顧客ニーズを満たす提案を続けていけるよう、努力していきたいと考えています。

